

私たちが普段話している言葉が日本中のどこでも通じるわけではない。言葉が地域で独自の進化を遂げて定着していくことも多いみたいだ。狭い日本と言われているけれど、少し離れた方言が解らないことや同じ言葉でも全く違った意味を持っていることがよくある。その中でも大阪は独自の進化を遂げた代表選手にあげられると思う。物事をはつきりと表現して、テンポの速い言葉なので怖いイメージを持たれる人も多いかも。しかし、意外と心温かく思いやりのこもった言葉なのだ。

昔から天下の台所と呼ばれた大阪なので「食」に関する言葉もたくさんある。「かしわ」これは鶏肉のことを大阪ではこう呼ぶ。鶏肉を開いた時の形が柏の葉の形に似ているかららしい。こう聞くと粹でおしゃれな言葉に聞こえてくるから不思議。確かに鶏肉よりはかしわの方が上品に聞こえる。猪をぼたん、馬をさくらと呼ぶのと同じような感覚なのかもしれない。猪や馬では野性的で生臭さが残ったイメージになる。でも、ぼたんやさくらのように花の名前にすると爽やかで洗練されたイメージに変化する。少しの言葉の変化でイメージが変わるセンスの良さに感心する。

食べ物の名前でクイズのような言葉がある。「鉄砲」と言う食べ物を想像してみてほしい。鉄砲は当たると死ぬところから河豚のことを表している。答えを聞くと「あー」と納得する、とてもセンスのいい言葉だと思う。言葉遊びのような遊び心がこもっていて、会話が膨らみをもつて広がるような言葉に感じる。

独特な言い方が定着している例では、食べものに「さん」や「ちゃん」などの敬称を付ける言い方。お豆は「お豆さん」、油揚げは「お揚げさん」のように「さん」の敬称が付く。同じ豆から出来ていても、お豆腐やおからは「さん」が付かない。飴玉には「あめちゃん」のように「ちゃん」の敬称が付く。チョコレートやガムにはもちろん「ちゃん」は付かない。「さん」や「ちゃん」の敬称が付いていても偉そうな感じではなく、逆にもっと身近な存在に感じられる。「さん」が付く一番変な例は「おはようさん」。朝の挨拶にも「さん」が付いてしまっている。なぜ？ それはよく解らないけれど「おはよう」よりは「おはようさん」の方が身近に感じるし、実際に仲の良い顔見知りの間で使うことが多い。「さん」が付くと偉くて遠くに思いそうなのに身近に感じるのはちょっと不思議。

昔使われていて今では年配の人が使う言葉もすごい力を持っている。「モータープール」は、モーターカーをプール（ためて）しておくところから駐車場の意味。「レイコー」は、冷たいコーヒーからアイスコーヒーの意味。最新の立体駐車場や洋風のおしゃれなカフェさえ、この一言で昭和にタイムスリップさせる力がある。この言葉だけで映画やドラマの世界、昭和のなかにひきこまれてしまう。華やかではないけれど温かい、のんびりとしたいい言葉

だと思う。

大阪は笑いとは切っても切れない地域でもある。そのサービス精神からなのか一生懸命説明するあまり擬音語が多くなる。二本目の角を右に回って突き当たりに駅がある場合、駅までの道を説明しようとする。この時、二本目の角までどれくらいの距離なのか、どんな角度で曲がっているのかなどをより詳しく説明しようと思う。でも急いでいると困るだろうと気遣って短い言葉で表現しようとする。だから、「この道をバーンと行って、キュツと右に曲がってシュツと行くとドーンと駅がある」になる。「バーン」は少し長い距離がある場合で、短いと「シュツ」とになる。「キュツ」と曲がるので90度前後の角度がある角を曲がることになる。「ギユツ」はもつと鋭角に曲がる場合に使う。駅が「ドーン」とあるのだから大きな駅である表現になっている。しかし、他の地域の人には意味が解らないし、詳しく説明しているつもりが余計に解りづらくして本末転倒になっている。これも大阪らしくて笑えるところが面白い。

他の地域の人には面白く、少し変に見えるかもしれない。でも大阪では特殊なことだとは思わずに、すべてが標準語だと思って話している。だから旅行などに出かけたときに言葉の違いや意味の差に気付き驚くこともしばしばある。このように大阪は独特な文化が根付いていて、独自の言葉が進化している。これはまさに言葉のガラパゴス。しっかりと受け継いで守っていくすばらしい言葉だと思う。